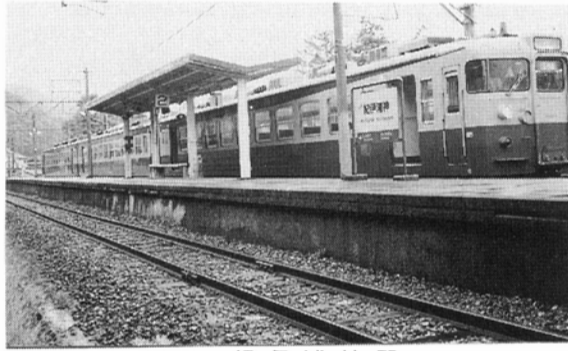


①7

山口熊野^{ゆうや}



紀伊浦神駅

きのくに線の発着駅の新宮駅を紀伊田辺行き普通列車が静かに発車……四十分ほどで紀伊浦神駅に到着しました。

その浦神の里に一八六四年（元治元年）十一月のこと、山口熊野が誕生しました。

山口熊野は明治十九年、二十二歳のとき、アメリカ合衆国へわたり、日本語新聞「新日本」を発行することになりました。その当時は、印刷のための日本語の活字がなく、「こんにやく版」を使用することになりました。

こんにやく版を作るための原料になる寒天がアメリカでは少なく、こんにやく版の新聞発行まで複雑な手間がかかることも、アメリカ人にはたいへんな驚きであったようでした。



山口熊野

このように、新しいことに挑戦し、一つのことに対して最後までやりとおす心意気を持った山口熊野青年でした。やがて、帰国し、明治三十一年三月（三十五歳）、代議士（国会議員）に当選しました。そして、この熊野の地に鉄道の建設をしてほしいとの願いを帝国議会（今の国会）に出しました。

当時の国会議員からは、

「紀州の山岳は、低くなつたか。」

「鉄道ができて何に乗せてこの険しい路を走るのか。」と、笑われたのであります。

明治四十三年の第二十六回帝国議会において、和歌山県・三重県の六人の国会議員の名で鉄道をつけてくれるように紀勢鉄道の案を提出することになりました。

しかし、案を帝国議会に提出するには国会議員三十人以上の同意が必要でしたが、みんなに冷たくされ、なかなか賛成してくれませんが、

大正四年頃、新宮でも、鉄道の建設を早く始めてもらえるように、山口熊野

の働きで国会議員の大会が開かれたのでした。

その後、数回にわたり、帝国議会に案を出しますが、なかなか許可されませんでした。しかし、山口熊野は、粘り強く何回も何回も国会に働きかけた結果、大正七年の第四十一帝国議会で、ようやく、大正八年度より鉄道を作ることが許可されました。

鉄道の工事の始まりは、伊勢いせの相可おうかと和歌山との東西の両端より着工するところになりましたが、熊野の地は最後に取り残されるようになってしまいました。そこで、山口熊野は、さらに中間からも工事を始めてほしいとの願いを、地元の人たちと話し合い、帝国議会に働きかけ、熊野の地からも工事を始めてもらえることになりました。

しかし、工事が始まって、多くの困難なことがたくさん出てきました。

その後、山口熊野は、長年の苦勞により病気になってしまいました。帝国議会では、困難なことに対して理解を示してくれる国会議員が出てきて、解決できることになりました。

やがて、明治三十一年より、数十年の長い年月がたち、山口熊野の願いと住民の願いが、かなう時が来ました。

昭和十五年、紀勢西線が開通しました。

汽車が始めて走ったときは、住民はびっくりして、用もないのに切符を買って乗り込むのか、田んぼの牛が汽笛に驚いて飛びはねるのでお百姓さんが仕事にならないと怒ってきたこともあったそうです。

この鉄道で、これまで、和歌山まで行くのに一日かかった船の旅から半日の時間で行けるようになりました。

そして、ついに、昭和三十四年七月十五日には、和歌山・亀山間が全線開通し、「紀勢本線」と呼ばれるようになりました。

紀伊浦神駅に一分ばかり停車して、潮岬へ遠足に行く児童たちで満員の紀伊田辺行き普通列車は出発していきました。

